

バリ便り

昨年5月にデンパサールに着任された千葉広久 在デンパサール総領事にバリにおける活動状況、バリの現況等について、6月号、7月号の二回にわけてご寄稿いただきました。引き続き興味あるお話をお楽しみ下さい。

在デンパサール総領事館

総領事 千葉広久

前月号に続き、今月号ではバリの文化面での最近の動きや、バリと日本との関係について、掻い摘まんでお伝えしたいと思います。

バリ文化・芸術の最近の動き

バリの大きな魅力の一つは、その豊かな自然と共に、バリ・ヒンズー教に根ざした文化・芸術の素晴らしさにあると言えるでしょう。バリ・ガムランの心に響く旋律、目にも華やかなバリ舞踏、そして独創的な絵画や彫刻など、バリには実に多様な文化・芸術が満ちあふれています。

これらの文化・芸術の存在がバリの国際的な観光地としての発展にも寄与してきたことは否定できませんが、他方で、地元では観光化に流されることなく古くからの伝統を大切にしつつバリ芸術の新たな発展を模索する努力も行われています。私はもとより文化の専門家ではありませんので、本稿では、芸術内容の解説ではなく、最近私が鑑賞する機会を得たいくつかの例を紹介しつつ、バリ文化にまつわる最近の動きについて少し述べさせて頂こうと思います。



男性によるレゴン・ダンス

まずは男性によるレゴン・ダンス。レゴン・ダンスはバリ舞踏の中で最も良く知られた踊りの一つですが、私たちが通常目にするのは少女たちによって踊られるレゴンです。しかし、その昔レゴンはバリの宮廷で貴族階級などの若い男性たちによって踊られていたのだそうです。1992年に結成されたグンタ・ブアナ・サリ楽舞団は、

王宮の伝統であった男性によるレゴン・ダンス「レゴン・ナンディラ」の復活を手がけます。そして、2012年12月に最初の作品が、2015年1月には第2作、そして昨年12月には第3作が発表され、何れも高い評価を得ました。ガムラン音楽の心地よいリズムに乗せて美しい女性の姿で舞う若い男性たちのたおやかな動きはどことなく日本の「歌舞伎」を連想させますし、また、舞踏のストーリーには日本の「古事記」に当たるようなバリ創世の神話物語が取り入れられています。今後も壮大な神話物語に基づいて継続して新たな作品が創作されていくことでしょう。この男性レゴン復活プロジェクトは、バリの伝統文化を再構築して新しい世代に伝え、バリ舞踏の更なる発展を目指すものとなっているのです。

次も踊りの話ですが、去る4月にバリ島北部ブレレン県のテジャクラ村の仮面舞踏劇「ワヤン・ウォン・テジャクラ」を鑑賞する機会がありました。同舞踏はバリの他の8種類の伝統舞踏と共に2015年にユネスコの世界無形文化遺産に登録されました。ヒトや動物などの様々な仮面を付けた踊り手によってラマヤナの物語が上演されるこの仮面舞踏劇は、300年ほど前に誕生したと考えられています。本来は村の寺院の宗教儀式の際に寺院の中だけで奉納され、オリジナルの仮面は今でも寺院の外に持ち出すことは禁じられているそうです。したがって、現在は外部での公演は仮面のレプリカを使って行われています。ユネスコの世界無形文化遺産に登録されたことで、この



仮面舞踏で使われる仮面
(Doddy Obenk氏提供)



テジャクラ村の寺院境内における仮面舞踏
(Doddy Obenk氏提供)

素晴らしい伝統舞踏を多くの人に知ってもらい、また大切に保存しようという動きが高まりました。そのために、今回の公演でも実際の舞台公演の他に一流の写真家たちによる見事な写真展や貴重なフィルムの上映会、そして書籍の出版等が同時に行われました。

このようにバリの伝統文化を大切にしようとする気運は高まっており、例えば、伝統文化の貴重なデータを最新のテクノロジーを使って保存しようという動きも出てきています。バリの情報技術高等教育機関の関係者が中心となり、1920年代や30年代のバリの貴重な写真や音源、舞踏フィルムなどを収集・整理し最新の技術で記録に残すアーカイブ活動が進められています。

多くのフェスティバル、そして日本との交流

バリでは年間を通じて各地で芸術祭や各種の文化イベントが頻繁に開催されています。毎年6月初旬から1ヶ月間に亘って開催される「バリ芸術祭 (Pesta Kesenian Bali)」は、その中でも最も権威ある芸術祭と言え、開会式には通常大統領夫妻も出席されます。華やかなパレードの後、バリ・アート・センター (Taman Budaya) において伝統芸能を中心



「バリ芸術祭」でのパレードの様子

にバリ各地の舞踏や音楽など200以上の演目が連続的に紹介されます。我が国を含め外国からの芸術団の参加も歓迎されています。入場は全て無料であり、屋台や各種の売店も開かれるので、週末の夜などは家族連れで大変な賑わいとなります。このバリ芸術祭は本年ですでに39回目を数える歴史ある行事ですが、文化・芸術活動の更なる発表の機会を望む声を受けて、州政府は「バリ・マンダラ・マハランゴ (Bali Mandara Mahalango)」(7-8月)と「バリ・マンダラ・ナワナティア (Bali Mandara Nawanatya)」(年間、但し1月と6-8月は除く)という新たな芸術祭を追加しました。前者は主に大衆文化の、そして後者は若者による文化・芸術活動の発表機会として人気を博しています。



「バリ芸術祭」開会式での踊り

このほかにも、サヌール・ビーチやレギアン・ビーチなど地区ごとの祭りや、ジャズ、スポーツ、食などの様々な分野における文化イベントも盛りだくさんです。特に日本との関係では、日本語学科を有する当地の3つの大学が例年「日本文化祭」を開

催しており、日本ファンの多くの若者で賑わっています。皆様もバリにいらっしゃる機会があれば、このようなフェスティバルを訪ねて見られるのも興味深いことと思います。なお、経済的な負担もあり「バリ芸術祭」等に日本から参加される文化人やグループの数は最近減っているようです。日本の文化や芸能の素晴らしさをバリの人々に理解して頂くと共に文化交流を図る絶好の機会ですので、関心を示してくださる方々がさらに増えることを期待しています。（「バリ芸術祭」のお問い合わせ先は、senipertunjukandisbud@gmail.com）

「バリ人と感性が近く、バリの芸術・文化を最も深く理解してくれるのは日本人だ。」これは、現地のある芸術家の方が私に語ってくれた言葉です。自然を畏敬し、自然と人間そして神々との調和を大切に考え、また祖先の霊を崇める等、バリと日本の文化の底辺には確かに相通ずるものがあるような気がします。そのような背景もあるのか、バリの芸術を学ぶ日本人は今もなお多く、またウブドゥ地方などを中心にして様々な日本人芸術家の方々が滞在し活動しておられます。日本とバリの芸術交流やコラボレーションも緊密に行われています。最近の例では、岩手県の岳神楽とバロン・ダンスの共演、能楽とバリ舞踏の共演など非常に高質でかつ斬新な文化的融合の世界が広がり始めており、今後の更なる発展が期待されます。

バリと日本との関係

最後に、日本とバリの最近の関係について簡単に触れておきます。

現在総領事館に在留届を登録いただいている在留邦人の数は約3千名ですが、実際には短期旅行者も含めてその倍以上の邦人が常に州内にいらっしゃるものと推測されます。在留邦人の多くは旅行会社、ホテル、レストラン等の観光関連産業の就業者、または国際結婚された方およびそのご家族などが多いのですが、最近では仕事をリタイアしてから当地に居住しあるいは当地と日本を往来する生活をされているご年配の方々も増えています。

バリ日本人会は本年度で創立27周年を迎え、400名あまりの個人会員および40



バリ日本語補習授業校「シューティング・スターズ」の踊り
(バリ日本人会広報部提供)

社を超える法人会員企業が、会員同士の親睦を図るとともに地元社会との交流親善活動を行っています。日本語補習授業校も設置され、プレイグループ、幼稚部、小・中学部そして本年度から新設された高校クラスに約 300 名の児童・生徒が在籍しています。上述のバリにおける大学文化祭や種々のフェスティバルには、日本人会の婦人グループによるグランタン（竹製の伝統打楽器）の演奏や、補習授業校の子供たちによる和太鼓やダンスのグループが参加し高い評価を得ています。恒例の盆踊り大会も人気を博しています。

日本人旅行者が多い当地では、伝統的に日本文化や日本語学習への関心も高いと言えます。統計（国際交流基金「海外の日本語教育の現状 2017 年発行」）によれば、バリ州での日本語学習者の総数は 66,703 人となっています。これはバリより格段に人口の多いジャカルタ首都特別州や中部ジャワ州の日本語学習者数を上回る数です。一昨年からはバリ州にも配置が開始された「日本語パートナーズ」は大変な好評を得ており、今年は配置パートナーズの数が増え、しかも遠隔地の学校にも配置される予定と伺っています。

近年、日本とバリの自治体間交流も活発化しています。熊本県とバリ州は昨年 11 月に農業、観光および教育分野における協力促進のための覚書（MOU）を締結しました。富山市はタバナン県との間でバリの伝統的な水利システムを活用した小規模水力発電事業を推進しています。このほか、福岡市とデンパサール市（教育分野）、気仙沼市とデンパサール市（漁業分野）などの協力が行われています。

来年 2018 年は日本とインドネシアの国交樹立 60 周年の節目の年です。これまでの両国の友好関係とその礎となられた先人たちの功績を振り返るとともに、若い世代にそれを引き継ぎ将来に亘ってさらに発展させていくための良い機会と言えるでしょう。バリにおいてもこのモメンタムを活かすための有意義な活動を行いたいと考え、当地の皆様とともに検討しているところです。